

小学校国語科教科書における日本神話について

川 俣 沙 織

A Study of Japanese Mythology in Elementary School Textbooks

Saori Kawamata

1. はじめに

現行の第1学年あるいは第2学年の小学校国語科教科書には「昔話や神話・伝承」として日本神話が掲載されているが、これは、2008（平成20）年度に改訂された前小学校学習指導要領において従前の「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」及び「C読むこと」という3領域による国語科の内容に新たに「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」が加えられるとともに、第1学年及び第2学年の「伝統的な言語文化に関する事項」として「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」と示されたことを受けてのことである。

現行教科書を作成している全5社の出版社のうち光村図書、教育出版、三省堂、東京書籍の4社が「いなばのしろうさぎ」¹を、学校図書1社のみが「やまたのおろち」を採用している。使用学年は三省堂のみが第1学年、他4社は第2学年である。「いなばのしろうさぎ」「やまたのおろち」はともに『古事記』に由来する日本神話だが、これらが小学校国語科教科書に採用されるのは学校図書『小学校こくご 2年 下』（1956）所収「いなばのしろうさぎ」、大日本図書『こくご 2年 2』（1955）所収「やまたのおろち」以来²のことである。

戦前、天皇家の正統性の根拠として『古事記』が国定教科書の教材に採用され、皇国民教育に利用されたことは家永三郎、海後宗臣らの研究によって指摘されて久しいが、棚田（2001）によれば、「『古事記』が大量に、しかも体系的に採録された」国定国語科教科書である1933（昭和8）年発行の第四期国定国語科教科書および1941（昭和16）年発行の第五期の国定国語科教科書およびその前後の第二期修正、第三期、第六期の国定教科書に所収された日本神話由来の題材を整理すると、『古事記』序文、そして『古事記』上巻から「アマテラスの岩屋戸こもり」「スサノオの大蛇退治」「稲羽の素戔」「オオクニヌシの国つくり」「オオクニヌシの国譲り」「天孫降臨」「ホオリノミコトの海宮訪問」の7題材が、『古事記』下巻から「神武天皇 タカクラジ」「神武天皇 八咫鳥

「神武天皇 エウカシオトウカシ」「垂仁天皇 タジマモリ」「景行天皇 ヤマトタケル西征」「景行天皇 ヤマトタケル東征」「景行天皇 オトタチバナヒメ」の7題材が採用されているが、いずれの教科書においても「いなばのしろうさぎ」は掲載されており、「やまたのおろち」も第六期以外のすべての教科書に掲載されている。「おとたちばなひめ」も「やまたのおろち」同様、第六期以外のすべての教科書に掲載されているが、1949（昭和24）年以降に発行³された小学校検定国語科教科書に採用されたのは、前掲の学校図書『小学校こくご 2年 下』（1956）所収「いなばのしろうさぎ」、大日本図書『こくご 2年 2』（1955）所収「やまたのおろち」以外には、『古事記』序文に相当する大阪書籍『改訂小学国語 5年 上』（1956）所収「『古事記』の編集」・同『小学国語 5年 上』（1960）所収「『古事記』の話」・同『小学国語 5年 上』（1964）所収「『古事記』の話」のみであり、「おとたちばなひめ」が再び採用されることはなかった。

教科書以前に『古事記』が子どもを対象に描かれたのは明治時代にまで遡る。谷本（2011）は、「明治時代以降に児童向けに描かれた古事記（以下、児童向け古事記と記す。）」である「明治期にはじめて外国人によって創作された児童向け古事記が収録された『ちりめん本』の『Japanese Fairy Tale Series』⁴と、その後日本人によって創作された『日本昔噺』叢書」を取り上げ、「児童向け古事記に最も頻繁に描かれるのは『いなばのしろうさぎ』だが、この作品が天皇制の文脈とはあまり関係」しておらず、「児童が読みやすい短い物語にすること、児童に理解できる内容であること、単独でも楽しめる内容であること、一話完結型にしやすい独立性のある内容であること等、稲羽の素戔が児童向けの一話完結型にしやすい条件を備えていた」と述べ、「いなばのしろうさぎ」をはじめとする「児童向け古事記は皇国民教育のために生まれたのか」というと、そう単純ではな」と指摘している。『古事記』に限らず、古典を幼児あるいは児童に向けて改作する際は、口語に逐語訳するのは適切でなく、幼児や児童にとってわかりやすく、親しみやすい物

語に再話する必要がある。「いなばのしろうさぎ」が児童向け古事記の代表として定着したのは、皇国民教育の教材としての適性の有無以前に、再話に適していたからであり、児童向けの文学作品として優れていたからこそであるという谷本の指摘は、同じく「Japanese Fairy Tale Series」に収録されている「やまたのおろち」と「うみさちやまさち」についても同様にあてはまる。現行教科書に「いなばのしろうさぎ」と「やまたのおろち」が採用されたのは、谷本が指摘した物語としての特性を備えており、かつ、棚田（2001）にある通り、かつての国定教科書の時代から両者が採用され続けてきた経緯があつたことと推察される。

2020（平成32）年度には、2017（平成29）年度に改訂された新小学校学習指導要領が全面施行となるが、教科書もこれに併せ新たに編集され、検定を経たのちに新要領と同じく2020（平成32）年度より全面实施となる。新要領においては〔知識及び技能〕及び〔思考力、判断力、表現力等〕の2領域に構成が改められたが、前者の具体的内容として「我が国の言語文化に関する事項」が、さらにこれに関する内容として「伝統的な言語文化」が示され、第1学年及び第2学年の内容として「昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞くなどして、我が国の伝統的な言語文化に親しむこと」と、前要領とほぼ同様の内容が示されており、新教科書においても継続して日本神話が、さらには「いなばのしろうさぎ」あるいは「やまたのおろち」が教材として採用される可能性が高いと見ていだろう。

本稿は、2020（平成32）年度の新教科書全面实施の前に、現行の各社の小学校国語教科書における日本神話について比較するものである。再話作品として、かつ、教材として分析し、それぞれの特徴を整理したい。

以下、弁別のため4社それぞれの「いなばのしろうさぎ」を光村版「いなばのしろうさぎ」（あるいは光村版）、教育出版版「いなばのしろうさぎ」（あるいは教育出版版）、三省堂版「いなばのしろうさぎ」（あるいは三省堂版）、東京書籍版「いなばのしろうさぎ」（あるいは東京書籍版）と呼び、これに合わせ学校図書の教科書に掲載されている「やまたのおろち」を学校図書版「やまたのおろち」と呼ぶこととする。

2. 現行教科書における「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」の再話作品としての特徴

現行教科書における「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」の再話作品としての特徴については原田（2011・2015・2016）に指摘がある。原田（2011）は当時発行されていた光村図書、教育出版、三省堂三者によ

る「いなばのしろうさぎ」を比較し、それぞれの特徴を以下の通り指摘している。

光村版はオオクニヌシ中心の物語で、登場人物の個性や心理の起伏を丁寧に描いており、登場人物の気持ちにより添って読み進めていく作品である。教育出版版は兎中心の物語である。登場人物の描き方がシンプルで、古い説話の雰囲気を楽しむに適した作品である。三省堂版は、時系列通りの物語展開になっている。より幼い子どもにもわかりやすい作品で、主人公は兎である。

また、原田（2016）は2015（平成27）年度より新たに採用された東京書籍版「いなばのしろうさぎ」と他三者とを比較し、その特徴として「登場人物の個性や心理の起伏にはあまり筆を割かずに、起きた出来事について簡潔に述べる形で物語が進んで行っている」点を指摘するとともに、「他社発行の教科書に採用されている稲羽の素戔神話の再話作品よりも、簡潔という意味においては原典の古事記の雰囲気を伝える形で再話がなされている」と評価している。また、「兎の予言が取り入れられているため、兎とオオクニヌシとの関係が、助けを求める愚か者と助ける優れた者という単純な関係に終わっていない」ことも指摘した。

「やまたのおろち」についても原田（2015）は題材を同じくする他の絵本作品との比較を通し、その特徴として「古事記に対する知識がなくても戸惑わないよう」にオロチ退治以前の高天原での乱行や草薙剣の天照大神への献上についてあえて触れないことで物語としての完結性を高めている点や、天つ神であるスサノオノミコトと国つ神であるアシナヅチとの上下関係を際立たせることなく、「よりフラットな関係で描いている」点、そしてオロチ退治の場面では他の絵本作品のようなグロテスクな描写を省き、あっさりとして描写している点を指摘し、「原典に寄り添いつつ、幼い読み手にとって親しみやすい再話となるよう工夫されている」と評している。

本節では原典の『古事記』⁵と現行教科書における「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」とを改めて比較し、原田（2011・2015・2016）による指摘を踏まえつつ、新たに別の観点からも検討を行い、それぞれの再話作品としての特徴を整理することとする。

<観点1-1 物語の展開—原典と現行教科書における「いなばのしろうさぎ」四者の比較—>

原田（2011・2016）は各社による「いなばのしろうさぎ」を比較する際に「物語の始めと終わり」ならびに「登場人物の描き方」に注目した。「物語の始めと終わり」とは物語の冒頭と末尾の物語展開のことを、「登場人物の描き方」とは登場人物の「心理の起伏や性格等に関す

る詳細な記述」のことを指す。

ではまず、「いなばのしろうさぎ」四者について、「物語の始めと終わり」を観点に比較を行う。原田（2011）では、光村図書、教育出版、三省堂の三者を比較し、原田（2016）では、東京書籍版の出典元である『きょうのおはなしなあに春（改訂版）』（西出みち 他 編、ひかりのくに、1997）に掲載されている「いなばのしろうさぎ」と東京書籍版「いなばのしろうさぎ」の物語展開とを比較しているが、ここでは原典である『古事記』の物語展開と各社の「いなばのしろうさぎ」の物語展開とを比較することとするとともに、新たに「物語の始めと終わり」を含む物語全体の展開を含め比較を行う。

『古事記』原文の「いなばのしろうさぎ」は物語の展開によって「①オオナムチ（オオクニヌシ）⁶・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」「⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言」「⑨兎の回復」「⑩兎による予言」の10の場面に整理することができる。この10の場面に相当する記述が現行教科書に掲載されている「いなばのしろうさぎ」四者の本文に存在するか否かを整理すると以下の通りとなる。

原文と大きく変わらない記述が物語展開の同一箇所を確認できる場合はその番号を記し、確認できない場合は番号の前に×を、原文の物語展開と同一の箇所に確認できるもののその内容が異なる場合は番号の前に△を付した⁷。三省堂版の場面⑦については、場面④・⑤・⑥に先行し冒頭に位置しており、また、内容も原文とは異なるため、場面④・⑤・⑥の前に△を付した上で記している。

物語の展開部である「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」「⑦兎によるオオナムチ（オオ

クニヌシ）への経緯の説明」、および結末部分である「⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言」「⑨兎の回復」に相当する記述が四者すべてにおいて確認できる点が共通している。

以下、物語の展開順に詳しく比較を行う。

物語冒頭の「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」については、東京書籍版は「いづもの国の おおくにぬしのみことには、たくさんの あに神がいました。」と原典の通りオオナムチ（オオクニヌシ）が八十神に先行して登場し、物語の中心として示されている。光村版では「むかし、むかし、大むかし。（改行）いづものくに、八十人ものかみさまの兄弟がおりました。」とまず八十神が登場している。八十神はそもそも「大勢の神々」という意味に解されるため、光村版での冒頭の「八十人ものかみさまの兄弟」にはオオナムチ（オオクニヌシ）も含まれるものと考えられるが、オオナムチ（オオクニヌシ）の呼称が初めて示されるのは前掲の記述に続く「そして、自分こそ、国をおさめるのにふさわしいと、たがいに力をきそい合っていました。」との描写の後の「でも、すえっ子のオオクニヌシだけは、あらそうことをこのみませんでした。」との箇所となっている。教育出版版でも冒頭で「いづもの国からおとなりのいなばの国へ行くとちゅうの海岸を、八十人の兄弟のかみさまが、行列を作って歩いていました。」との八十神が登場しているが、光村版同様、ここの「八十人の兄弟のかみさま」にはオオナムチ（オオクニヌシ）も含まれるものと考えられるものの、オオナムチ（オオクニヌシ）の呼称が初めて登場するのは「④八十神と兎の出会い」「⑤八十神による兎への虚偽の助言」の描写を経た後、「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」に相当する箇所である。三省堂版では「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」「③オオナムチ（オオクニヌシ）の扱い（従者のよう）」に相当する記述はなく、原典と異なり、「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」に相当する記述から物語が始まっている。ただし他三者

表1 原典と各社「いなばのしろうさぎ」の物語構成 対照

原典の物語構成	光村	教育出版	三省堂	東京書籍
①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場	△①	△①	×①	①
②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示	△②	×②	×②	②
③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い	③	×③	×③	③
④八十神と兎の出会い	④	④	△⑦ ④	④
⑤八十神による兎への助言（虚偽）	⑤	⑤		⑤
⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い	⑥	⑥	⑤	⑥
⑦兎による経緯の説明	⑦	⑦	⑥	⑦
⑧オオナムチ（オオクニヌシ）による兎への助言	⑧	⑧	⑧	⑧
⑨兎の回復	⑨	⑨	⑨	⑨
⑩兎による予言	×⑩	×⑩	×⑩	⑩

の「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」が、三人称視点によって語られる①から⑥までと⑧から⑨までの場面に兎による一人称視点の回想が話中話として挿入されているのに対し、三省堂版は冒頭から結末まで兎を中心にした物語が三人称視点で時系列に沿って描写されている。

「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」については東京書籍版のみ記述があり、光村版にも「ヤガミヒメ」との名前は示さないものの「きれいなおひめさまをおよめにもらおう」との記述があるが、教育出版版と三省堂版においては旅の目的自体が示されておらず、教育出版版では八十神については「行列を作って歩いていました」との記述が、オオナムチ（オオクニヌシ）については「八十人の兄弟のいちばんおしまいに、おおくにぬしがいました」との記述がある。三省堂版では八十神については「そこへとおりかかった」との記述があり、オオナムチ（オオクニヌシ）については「やってきました」とだけ記されている。なお、旅の目的地である「因幡」、兎の住む「沖ノ島」の地名は四者すべてにおいて記されているが、オオナムチ（オオクニヌシ）と八十神の住む「出雲」については三省堂版を除く三者に記述があり、兎と神々が出会った「気多」については光村版のみ記述されている。

「③八十神による従者のようなオオナムチ（オオクニヌシ）の扱い」については、光村版には「たびにもつは、大きなふくろにつめて、オオクニヌシにかつがせました。」との記述が、東京書籍版には「すえっ子のおおくにぬしのみことに大きなにもつをもたせて家を出ました。」との記述があるが、教育出版版と三省堂版には該当する記述は認められない。

「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」については、前述の通り、三省堂版において物語冒頭に配置されている点に加え、兎がワニの背中を渡る場面の描写にも相違が見られる。光村版は「わたしは、わにの上を、一つ二つと数えながら、ぴょんぴょんとんで行きました。」、三省堂版は「ウサギは しめたとばかり、サメのせなかの上を とびはねながら、『一びき 二びき 三びき……。』と、かぞえて 行きました。」、東京書籍版は「一つ、二つとならんだ さめのせなかを とびながら、わたしは おかしくて たまりません。」と、いずれも一息にワニの数を記しているのに対し、教育出版版のみ「そこでほくは、はじめのわにのせなかののって、『一つ。』（改行）も一つぴょんととびのって、（改行）『二つ。』（改行）も一つぴょんととびのって、（改行）『三つ。』と、数えながら、ぴょんぴょんきしの方へ近づいてきました。」と、改行を交えつつ、「も一つぴょんととびのって」という同じ文言の繰り返

しとともに段階的に一匹一匹、ワニの数を数え上げる描写となっている。この描写により、危険なワニの背中を渡る緊張感が演出されるとともに、次の展開への期待が高められていると言えるだろう。

「⑩兎による予言」については、東京書籍版のみ「『やがみひめは きつと、あなたと けっこんする ことでしょう。あなたは、今は にもつもちの おともですが、帰りは きつと、あに神さまたちが おともになって いる ことでしょう。』（改行）うさぎの 予言した とおりに なりました。かしこくて、心の やさしい おおくにぬしのみことは、この 国を よく おさめて、人びとの ぐらしは 少しずつ ゆたかに なって いました。」との記述があるが、光村版は「それからというもの、『オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中で一番すぐれた方だ。』と、世（よ）につたわるようになりました。」と、兎の予言については触れられることなく後々の顛末が記されており、三省堂版では「『ありがとうございました。』（改行）ウサギは、オオクニヌシノミコトが あるいて いった ほうを むいて、おれいを いました。（改行）ふかく ふかく あたまを 下げて、なんべんも なんべんも、おれいを いったのでした。」と兎がオオナムチ（オオクニヌシ）へ感謝する様子が丁寧に描写されている。教育出版版は「うさぎが教えられたとおりにやってみると、たちまち毛皮のあるもとの体にもどりました。」と「⑨兎の回復」に相当する記述がなされた後、「——これが、いなばのしろうさぎです。」との物語の題名の由来に帰着する一文によって締めくくられている。

以上をまとめると以下の通りとなる。

東京書籍版は「⑩兎による予言」も含め、原典にあるすべての場面が原典通りの順序で記されており、「気多」の地名が記されていないことを除けば、四者の中で最も原典の本文の形を残した再話がなされている。

光村版は「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」においてオオナムチ（オオクニヌシ）よりも先に八十神が登場している点および「②旅の目的（ヤガミヒメとの結婚）の提示」においてヤガミヒメという固有名詞が示されていない点、「⑩兎による予言」でなくオオナムチ（オオクニヌシ）の後の栄達を示唆する描写に代わっている点を除けば、ほぼ原典通りに物語が展開している。加えて、原典の本文にある地名をすべて記しており、東京書籍版に次いで原典の本文を尊重していると評価できる。

教育出版版は「①オオナムチ（オオクニヌシ）・八十神の登場」にて登場するオオナムチ（オオクニヌシ）が「⑥オオナムチ（オオクニヌシ）と兎の出会い」に相当する箇所初めて登場する点、旅の目的が示されない

点、オオナムチ（オオクニヌシ）に対する兄神たちの従者のような扱いについての言及がない点、そして「⑩兎による予言」に相当する箇所が確認できない点が原典と異なるが、物語の一番の山場となる「⑦兎によるオオナムチ（オオクニヌシ）への経緯の説明」の臨場感あふれる描写が児童の関心を引き付ける優れた再話であると評価できる。

三省堂版は物語の構成を大幅に変更している点に加え、旅の目的・オオナムチ（オオクニヌシ）に対する兄神たちの従者のような扱いについての言及・兎による予言がなく、地名も稲羽と淤岐島を記すに留めているが、これらは三省堂版の使用学年が1学年であることと関係していると考えられる。物語の構成の変更も細部の省略も、すべて子どもによりわかりやすい表現を志向してのものであり、平易さと親しみやすさの点では三省堂版が最も優れていると評価できるだろう。

＜観点Ⅰ－2 物語の展開—原典と現行教科書における「やまたのおろち」の比較—＞

続いて、学校図書版「やまたのおろち」と原典の「やまたのおろち」とを比較する。

原典である『古事記』の八俣の大蛇退治説話は物語の展開によって「①高天原追放の経緯」「②追放されたスサノオが櫛を発見し河の上流へ向かう」「③スサノオとテナヅチ・アシナヅチの老夫婦、そしてクシナダヒメとの出会い」「④アシナヅチによる経緯の説明」「⑤アシナヅチによるヤマタノオロチの外見描写」「⑥スサノオによるアシナヅチへのオロチ退治とそれに伴うクシナダヒメとの婚姻の提案」「⑦アシナヅチによるスサノオへの誰何」「⑧スサノオによる名乗りと老夫婦によるクシナダヒメとの婚姻の承諾」「⑨スサノオがクシナダヒメを

櫛に変え角髪にさす」「⑩スサノオへの老夫婦への酒造りと設置の指示」「⑪オロチの出現と飲酒・昏睡」「⑫スサノオによるオロチ退治・オロチの尾から都牟羽の大刀が出現」「⑬都牟羽の大刀のアマテラスオオミカミへの献上」「⑭宮殿の建設と詠歌」の14の場面に整理することができる。この14の場面に相当する記述が学校図書版「やまたのおろち」の本文に存在するか否かを整理すると以下の通りとなる。

「①高天原追放の経緯」「⑬都牟羽の大刀のアマテラスオオミカミへの献上」については一切記述がなく、「⑭宮殿の建設と詠歌」については「詠歌」の描写が省略されている。一方で「⑭宮殿の建設と詠歌」において宮殿の建設の前に、「スサノオのミコトとクシナダヒメは、けっこんをしてすむところを、あちこちさがしました。」という、原典にはないクシナダヒメとの結婚についての記述と「二人はここにござんをたて、子どもにもめぐまれて、しあわせにくらしました。」というその後の繁栄についての簡潔な描写が補完されている。これらは「やまたのおろち」の物語を『古事記』の連続する物語から切り離し、児童向けによりわかりやすくするための工夫であろう。この省略と補完を除けば、学校図書版「やまたのおろち」は原典の展開通りに物語が進行している。

地名については「高天原」（学校図書版では「たかまのはら」）、「出雲」（学校図書版では「いずも」）、「鳥髪」（学校図書版では「とりかみ」）、「肥河」（学校図書版では「ひの河」）、「高志」（学校図書版では「こし」）、「須賀」（学校図書版では「すが」）と原典にあるすべてを記しており、登場人物の呼称についても「スサノオノミコト」（学校図書版では「スサノオノミコト」あるいは「ミコト」）はもちろん、「オオヤマツミノカミ」「アシナヅチ」「テナヅチ」「クシナダヒメ」「ヤマタノオロチ」（学

表2 原典と学校図書版「やまたのおろち」の物語構成 対照

原典の物語構成	学校図書
①高天原追放の経緯	×①
②追放されたスサノオが櫛を発見し河の上流へ向かう	②
③スサノオとテナヅチ・アシナヅチの老夫婦、そしてクシナダヒメとの出会い	③
④アシナヅチによる経緯の説明	④
⑤アシナヅチによるヤマタノオロチの外見描写	⑤
⑥スサノオによるアシナヅチへのオロチ退治とそれに伴うクシナダヒメとの婚姻の提案	⑥
⑦アシナヅチによるスサノオへの誰何	⑦
⑧スサノオによる名乗りと老夫婦によるクシナダヒメとの婚姻の承諾	⑧
⑨スサノオがクシナダヒメを櫛に変え角髪にさす	⑨
⑩スサノオへの老夫婦への酒造りと設置の指示	⑩
⑪オロチの出現と飲酒・昏睡	⑪
⑫スサノオによるオロチ退治・オロチの尾から都牟羽の大刀が出現	⑫
⑬都牟羽の大刀のアマテラスオオミカミへの献上	×⑬
⑭宮殿の建設と詠歌	△⑭

校図書版では初出のアシナヅチによる発言とその発言を受けたスサノオの発言中の2箇所のみ「ヤマタノオロチ」,以降は「オロチ」(「アマテラスオオミカミ」と原典の通りに忠実に記されている。事物については、「十拳の剣」,「都牟羽の大刀」,「草那芸の大刀」のすべてが「つるぎ」と記されているが,これも物語の構成の省略・補完と同様,児童向けによりわかりやすくするための工夫であると考えられる。

＜観点Ⅱ 登場人物の個性や心理の起伏—原典と現行教科書における「いなばのしろさぎ」および「やまたのおろち」の比較—＞

次に,「登場人物の個性や心理の起伏」に注目し,比較を行う。各本文より「登場人物の個性や心理の起伏」に関連する箇所として登場人物の外見・内面・言動に関する記述を抜き出し,整理すると以下の通りとなる。

光村版「いなばのしろさぎ」におけるオオナムチ(オオクニヌシ)は,①の記述から好戦的でなく穏やかな人柄が,②の記述から優しい人柄が,③の記述から慈悲深い人柄が内面として窺える。八十神については,①②③の記述から,他者を使役するのに躊躇いがなく,思いやりのない性格が,④の記述から非情で嗜虐的な性格が感得される。ヤガミヒメについては①の外見の美しさにつ

いての描写があるのみである。兎については,②の記述から利口であると評価できる一方,③の「つい」という記述から迂闊さや「だまされた」との発話からずるがしこい性格が感じられる。原田(2011)は光村版「いなばのしろさぎ」を「登場人物の個性や心理の起伏を丁寧に描いており,登場人物の気持ちにより添って読み進めていく」と評したが,特にオオナムチ(オオクニヌシ)と八十神について詳しく描写されており,児童はオオナムチ(オオクニヌシ)と自己を重ねることで八十神の振る舞いに憤ったり,兎に同情を寄せたりといった楽しみ方ができるだろう。

教育出版版は,兎については②の「だましてやろう」「言ってやりました」および④の「だましてやった」という記述において補助動詞の「やる」が用いられており,兎のワニに対する侮りが感じられる。また,④の「ほうら,まんまと」との記述からも驕慢な性格が見て取れるが,③の「思わず」との記述には兎の迂闊さが表れている。一方,八十神については①の記述があるのみで,オオナムチ(オオクニヌシ)についても,①の「やさしい」も②の「親切」もありきたりな形容であり,オオナムチ(オオクニヌシ)の人柄を際立たせるほどの描写とは言い難い。ワニについては外見・内面・言動に関する記述は皆無であった。原田(2011)は教育出版版「いなばの

表3 各社教科書における日本神話教材の学習指導要領の内容との関連

学習指導要領の内容		光村	教育出版	三省堂	東京書籍	学校図書
C「読むこと」	(1) 指導事項	(ア)「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること。」				○
		(ウ)「場面の様子について,登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと。」	○	.	.	○
		(エ)「文章の中の大事な言葉や文を書きぬくこと。」			.	
		(カ)「楽しんだり知識を得たりするために,本や文章を選んで読むこと。」				○
(2) 言語活動例	(イ)「物語の読み聞かせを聞いたり,物語を演じたりすること。」	★	.		◇	
	(オ)「読んだ本について,好きなどを紹介すること。」			.		
〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕	ア「伝統的な言語文化に関する事項」	◎	◎	.	◎	◎
	イ「言葉の特徴やきまりに関する事項」	.	.			
	ウ「文字(漢字)」				○	
	(ウ)第2学年においては,学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また,第1学年に配当されている漢字を書き,文や文章の中で使うとともに,第2学年に配当されている漢字を漸次書き,文や文章の中で使うこと。」				○	

注:表中の◎○・★◇の記号は各出版元の資料のママ。

しろうさぎ」を「登場人物の描き方がシンプル」と評したが、この指摘の通り、兎以外の登場人物に関する描写が四者の中で最も薄いことが確認できた。

三省堂版「いなばのしろうさぎ」は他三者の「いなばのしろうさぎ」と異なり、ワニについての描写が充実している。特に②の「むねをはって」「きまっているだろう」という記述から、ワニの尊大で自信にあふれた様子を感じることができる。兎については、①の「しめたとばかり」という記述や②の「やあい」という発話から、光村版および教育出版版の兎同様、ずるがしこい性格が見て取れるが、③の記述では一転誠実な性格が感じられる。何度も頭を下げて礼を言うという言動について描写することで、直接兎の内面について描写することなく、兎が心から改心し、オオナムチ（オオクニヌシ）に感謝していることを表現している。八十神については「いじわる」「からかった」との記述で、直截的にその人柄を示している。オオナムチ（オオクニヌシ）については、①の「どうされた」という発話から、兎に敬意を払っている様子や「かわいそうに」「やさしく」という記述によって慈悲深く優しい人柄が描かれている。

東京書籍版「いなばのしろうさぎ」は、ヤガミヒメについては光村版と同様に①の外見の美しさについての描写があるのみである。八十神については、①の記述から弟を使役することを当然と考えている様子や②④と繰り返し「いじわる」と記すことでその人柄を示している。さらには、③の「わっはは」という高らかな笑い声によって、意地の悪さと傲慢な性格を印象付けている。兎については、②で「あわれな」と地の文に記すことによって、毛をむしりとられた上に塩水によっていっそう痛めつけられた兎の傷の様子を表現しているが、それとは対照的に③④⑤の記述によって、兎の利口でありながら浅はかであろうかつな性格を描いている。オオナムチ（オオクニヌシ）については、①の「やさしい」という兎の発話や②の「かしこくて、心のやさしい」との地の文の記述によってその人柄を表してはいるが、教育出版版同様、いたってありきたりな形容であり、オオナムチ（オオクニヌシ）の人柄を際立たせるほどの描写とは言えない。原田（2016）は東京書籍版「いなばのしろうさぎ」について、「登場人物の個性や心理の起伏にはあまり筆を割かず、起きた出来事について簡潔に述べる形で物語が進んで行っている」と指摘したが、東京書籍版「いなばのしろうさぎ」は、原典同様に兎による予言も含む物語中の出来事すべてが、オオナムチ（オオクニヌシ）の統治者としての適性を証明する装置として配置されており、兎と八十神の描写には一定の紙幅を割きつつも、オオナムチ（オオクニヌシ）についてはほとんど触れず、出来事の顛末を中心に記述がなされていることが確認できた。

学校図書版「やまたのおろち」は、ヤマタノオロチの外見について②において詳細に記している点が出色である。また、①のアシナヅチの発言と③の地の文において繰り返し「おそろしい」と記すことで、その強大さと危険性を強調している。③における「おそろしい」との文言の前に「聞きしにまさる」という、第2学年の児童にとっては難解な文語的表現を取っていることも、オロチの恐ろしさやおぞましさをさらに際立たせていると言っていいだろう。一方、スサノオノミコトの描写はほとんどなく、唯一①の「むしゃぶるい」という記述から勇猛果敢で恐れを知らない性格を見て取ることができる。原田（2015）は学校図書版「やまたのおろち」を「原典に寄り添いつつ、幼い読み手にとって親しみやすい再話となるよう工夫されている」と評しているが、特にオロチの外見描写や文語的表現の面白さが読み手である児童には新鮮に感じられ、興味をそそるものと考えられる。

以上、原典と各社の物語展開および登場人物の個性や心理の起伏を中心に相違点を整理したが、原田（2015・2016）の指摘する通り、東京書籍版「いなばのしろうさぎ」および学校図書版「やまたのおろち」は他の教科書掲載作品や他の絵本作品と比べ、原典に忠実に再話がなされていることが改めて確認された。特に、原典にある地名や登場人物の呼称を忠実に記している点が今回新たに確認できた。

また、光村版は原典を尊重しつつも児童向けに親しみやすく再話がなされている点および登場人物の心理描写が詳細になされている点、教育出版版は山場である兎のワニの背中渡りの場面描写の臨場感において秀でている点、三省堂版は児童向けに平易に親しみやすく再話がなされている点が特徴であることも確認できた。

3. 「いなばのしろうさぎ」四者と「やまたのおろち」の学習指導要領の内容との関連

では次に、学習指導要領の内容との関連において五者を比較する。

光村版「いなばのしろうさぎ」は、「その単元・教材が主たる学習場面であり、確実に身につけることが望まれる」事項として〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を、「主たる学習場面は他にあるが、そこで学習することでそれを支えたり定着させたりすることが望まれる」事項としてC「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」を、「学習経験として蓄積させる」事項として〔伝統的な言語文

表4 各社「いなばのしろうさぎ」および学校図書版「やまたのおろち」における人物描写

出版社	登場人物	外見・内面・言動に関する記述を通じた人物描写
光村	オオナムチ (オオクニヌシ)	①あらしうことをこのみませんでした(地の文) ②やさしく、「どうしたのかね。」とききました。(地の文) ③「おお、かわいそうに」(兎への発言) ④「オオクニヌシこそ、八十人の兄弟の中でいちばんすぐれた方だ。」と、世につたわるようになりました。(地の文)
	八十神	①弟をいくじなしとわらい、しごとを言いつけては、こきつかいました(地の文) ②たびのにもつは、大きなふくろにつめて、オオクニヌシにかつがせました(地の文) ③弟をのこしてどんどん行く(地の文) ④「これはおもしろいうさぎだ。からかってやろう。」(兎への発言)
	ヤガミヒメ	①きれいな(地の文)
	兎	①あまりのいたさに うさぎが ないと、(地の文) ②「なるほど、うさぎさんはかしこい。」(ワニによる発言) ③うれしくなって、つい、「きみたち、だまされたね。」と言ってしまったのです。(兎の回想場面での地の文・ワニへの発言)
	ワニ	①そのとたん、おこったわにが(以下略)(地の文)
教育出版	八十神	①みんなわらいながらそばを歩いていきました。(地の文)
	兎	①うさぎはいたくてたまらず、ころげながらおいおい歩いていました。(地の文) ②わにのやつをだましてやろうと考えたんです。ぼくはわにに言ってやりました。(兎の回想場面での地の文) ③そしてもうだいじょうぶというところで、思わずさげんでしまいました。(兎の回想場面での地の文) ④「ぼくはこっちの国に来たかったんだ。ほうら、まんときみたちをだましてやったぞ!」(ワニへの発言)
	オオナムチ (オオクニヌシ)	①やさしく(地の文) ②親切な(兎の発言)
三省堂	ワニ	①げん気に およぎまわって(地の文) ②むねを はって いいました。「サメの ほうが おおいに きまって いるだろう。」(地の文・兎への発言)
	兎	①しめたとばかり(地の文) ②うれしくて、おもわず いって しまったのです。「やあい、サメさんたちよ。(以下略)」(地の文・ワニへの発言) ③ふかく ふかく あたまを 下げて、なんべんも なんべんも おれいを いったのです。(地の文)
	八十神	①この かみさまは、いじわるな かみさまで、はだかの ウサギを からかったのです。(地の文)
	オオナムチ (オオクニヌシ)	①「どうされた。かわいそうに。(以下略)」と、やさしく おしえて くれました。(兎への発言・地の文)
東京書籍	ヤガミヒメ	①きれいな(地の文)
	八十神	①末っ子の おおくにぬしのみことに 大きな にもつを もたせて(地の文) ②いじわるな(地の文) ③「毛を 元のように する ためには(中略)海風に あたって おれば よいわ。わっはっは。」(兎への発言) ④「いじわるな あに神さまたちと くらべて、おおくにぬしのみことの なんとやさしいこと。」(兎による発言)
	兎	①すっかり 毛を むしりとられて ないて いるのに 出あいました。(地の文) ②あわれな(地の文) ③おかしくて たまりません。(兎の回想場面での地の文) ④思わず、「わあい、うまく いったぞ。」と さげびました。(兎の回想場面での地の文・ワニへの発言) ⑤「うまく だまして やった もんだ。(以下略)」(ワニへの発言)
	オオナムチ (オオクニヌシ)	①「いじわるな あに神さまたちと くらべて、おおくにぬしのみことの なんとやさしいこと。」(兎の発言) ②かしこくて、心の やさしい おおくにぬしのみことは、(以下略)。(地の文)
学校図書	アシナヅチ・テナヅチ ・クシナダヒメ	①おじいさんとおばあさんとむめが、なっています。(地の文) ②「(前略)さい後のこむすめが、きょうにもたべられてしまうのか、それがかなしくてないているのです。」(スサノオへの発言)
	ヤマタノオロチ	①おそろしい(アシナヅチによる発言) ②「体は一つ。頭としっぽは八つ。目は、ほおずきのように赤く、せなかはこけだらけで、ひのきや、すぎの木が生えています。長さは八つの谷と、八つの山にまたがるほどです。」(アシナヅチによる発言) ③聞きしにまさるおそろしいオロチが(地の文)
	スサノオノミコト	①むしゃぶるいをしました。(地の文)

化と国語の特質に関する事項]イ「言葉の特徴やきまり」(カ)「文の中における主語と述語の関係に注意すること」を指定している。さらに「他教科・他教材・資料等との関連」としてC「読むこと」(2)言語活動例(イ)「物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること」を示している。

教育出版版「いなばのしろさぎ」は、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」に対応する「単元／教材の目標」として「古くから伝わっている話を、興味をもって聞き、場面の様子を想像する」および「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」の2点を「重点指導事項」として示し、その他の指導事項として〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕イ「言葉の特徴やきまりに関する事項」(カ)文の中における主語と述語との関係に注意すること」に対応する「単元／教材の目標」としての「文の中における主語と述語との関係に注意すること」を、C「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」に対応する「単元／教材の目標」としての「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」を、C「読むこと」(2)言語活動例(イ)「物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること」に対応する「単元／教材の目標」としての「物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること」を挙げている。また、他科目との関連として「☆生活科：地域に伝わる昔話や神話・伝承などを調べ、興味をもつ」「☆道徳：4⁹(5)郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ」の2点を併せて示している。

三省堂版「いなばのしろさぎ」は、C「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」、C「読むこと」(1)指導事項(エ)「文章の中の大事な言葉や文を書きぬくこと」、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」、C「読むこと」(2)言語活動例(オ)「読んだ本について、好きなどころを紹介すること」の4つを指導事項として示しているが、四者の重要度の差については特に記していない。ただ、C「読むこと」(1)指導事項の(ウ)と(エ)に続き、〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕を挙げたのちに再びC「読むこと」の(2)言語活動例(オ)を挙げていることから、重要度の順に項目を列挙していることが窺える。よって、前三者を重点指導項目、末尾のC

「読むこと」の(2)言語活動例(オ)をそれらに次ぐ指導項目として位置付けているのではないかと推察される。

東京書籍版「いなばのしろさぎ」は、「重点指導事項」として〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を、その他の指導事項としてC「読むこと」(1)指導事項(カ)「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」および〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ウ「文字(漢字)」(ウ)「第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと」の2点を、「言語活動例との関連」としてC「読むこと」(2)言語活動例(イ)「物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりすること」を挙げている。

学校図書版「やまたのおろち」は、「重点項目」として〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を、それに次ぐ指導事項としてC「読むこと」(1)指導事項(ア)「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること」およびC「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」の2点を挙げ、併せて「学習活動」として「①場面の様子や人物の言動を読み取る。②好きな場面を選んで、音読する。③大蛇や竜が出てくる他の物語と、どんなところが似ているかを話し合う。④「因幡の白うさぎ」や「海幸山幸」などの関連した物語を読み進める」との4つの具体的活動例を、そして「評価基準」として「【関心】¹⁰神話「ヤマタノオロチ」に関心をもち、描かれている様子を楽しみながら読もうとしている。【読む】場面や人物の様子などを想像しながら音読している。【伝国】神話を読んだり読み聞かせを聞いたりして、その感想を伝え合っている」との3つの評価観点を示している。

五者すべてが〔伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項〕ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を指導項目として挙げており、特に三省堂以外の四者は重点指導項目と位置付けている。次に指導事項として挙げている出版社が多いのはC「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこ

と」である。東京書籍以外の四者が指導事項として挙げており、特に光村は最重要指導項目に次ぐ重要な指導項目と位置付けている。東京書籍のみC「読むこと」(1)指導事項(ウ)「場面の様子について、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むこと」を指導事項として挙げていない点は注目に値するが、一方で、指導事項として挙げている出版社が1社のみのものも4点ある。これらが言うなれば他四者と自者とを分かち独自の部分であると言えよう。

学校図書は唯一C「読むこと」(1)指導事項(ア)「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読(下線は筆者による。以下同様)すること。」を指導事項として挙げているが、重要指導事項として「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」を挙げつつも、教員による読み聞かせに並ぶ主要な学習活動として児童自身による音読を想定していることがわかる。これは、前節において指摘した学校図書版「やまたのおろち」の特長であるオロチの外見描写が詳細になされている点および文語的表現を用いつつ言葉の響きの面白さを表現している点と整合するものである。

東京書籍は唯一C「読むこと」(1)指導事項(カ)「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」および「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ウ「文字(漢字)」(ウ)「第2学年においては、学年別漢字配当表の第2学年までに配当されている漢字を読むこと。また、第1学年に配当されている漢字を書き、文や文章の中で使うとともに、第2学年に配当されている漢字を漸次書き、文や文章の中で使うこと」を指導事項に挙げているが、後者については単元ごとに習得した漢字を積極的に使うことを推奨することを意図しているもので、東京書籍版教科書全20単元のうち18単元において指導事項として挙げられている。そのため、他社による「いなばのしろさぎ」および「やまたのおろち」との比較において特筆すべきことはないと考えられるが、前者については次のような教育的配慮を読み取ることができる。単元「日本のことのは 言いつたえられている お話を 知ろう」の114~115頁で地域に伝わる民話の一例として「だいだらぼうのお話」を紹介しており、続く116頁では「むかしから 言いつたえられている お話の中には、いろいろな 神さまが 出てくる 『神話』と いう もの も あります」と記したのちに「やまたのおろちのお話」と「いなばの 白うさぎのお話」の一部を抜粋し、「『いなばの 白うさぎ』のお話を 読んで もらいましょう。」と146頁の巻末付録「言いつたえられている お話を 読もう」の「い

なばの 白うさぎ」に誘導している。さらに117頁には民話の絵本3冊と日本神話の絵本3冊の書影を掲載しつつ「すんで いる ところに つたわる お話や 神さまが 出て くる お話の 中から、おもしろかったところを えらびましょう。声に出して 読み、友だちに 聞いてもらいましょう」と記すことで、C「読むこと」(1)指導事項(カ)「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」との関連を明確に示しているのである。ひとつの単元、ひとつの教材を通し、その周辺の知識に触れたり、お話を楽しんだりすることに接続しやすくする意図が感じられる。

三省堂は唯一、C「読むこと」(2)言語活動例(オ)「読んだ本について、好きなところを紹介すること」を指導項目として掲げているが、学校図書同様、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」ア「伝統的な言語文化に関する事項」(ア)「昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること」との関連から、教員による読み聞かせを聞くに留まることなく、その後の児童たち自身による読み合いや交互にすきなところを紹介・発表し合うことを学習活動として明確に示しているものと考えられる。

4. おわりに—幼児教育・絵本との関連から—

以上、現行教科書に掲載されている日本神話について、原典との対照および学習指導要領との関連において分析したが、これに関連し、絵本における日本神話について触れ、結びとする。

光村図書の「いなばのしろさぎ」および学校図書の「やまたのおろち」は書き下ろしであり、他四者は既刊の絵本あるいは児童向けお話集からの出典である。周知のとおり、絵本は家庭だけではなく幼稚園や保育園といった幼児教育・保育の現場でも広く活用されているとともに、小学校以降の国語科の学習や読書活動への導入においても重要な役割を果たす言語教材のひとつである。小学校学習指導要領と同様に2017(平成29)年度に改訂された幼稚園教育要領においても、「教師が指導を行う際に考慮する」べき「ねらい及び内容に基づく活動全体を通して資質・能力が育まれている幼児の幼稚園修了時の具体的な姿」である「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のひとつとして「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と示されている¹¹⁾。では、日本神話を題材とする絵本の刊行数はと云うと、2018年現在、入手可能な「いなばのしろさぎ」の絵本

表5 日本神話を題材とした現在入手可能な絵本・お話集

	書名	著者名	発行年	出版社
「いなばのしろうさぎ」を題材とした現在入手可能な絵本	日本の神話 古事記えほん【四】 いなばの白うさぎ ～オオナムヂとヤガミヒメ～	三浦 佑之 監 萩原 規子 文 山村 浩二 絵	2016年	小学館
	改訂新版 せかい童話図書館 9 いなばのしろうさぎ	秋 晴二 著 高山 洋 著	2014年	いずみ書房
	因幡の白うさぎ	伊達 恵美子 著	2012年	文芸社
	いなばのしろうさぎ	いもと ようこ 文・絵	2010年	金の星社
	いなばの白ウサギ	谷 真介 文 赤坂 三好 絵	2006年	俊成出版社
	いなばの白うさぎ	照沼 まりえ 文 四分一 節子 画	2002年	永岡書店
	いなばのしろうさぎ	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
「やまたのおろち」を題材とした現在入手可能な絵本	スサノオ 日本の神話	飯野 和好 文・絵	2018年	パイ インターナショナル
	日本の神話 古事記えほん【三】 やまたのおろち ～スサノオとクシナダヒメ～	三浦 佑之 監 萩原 規子 文 伊藤 秀男 絵	2016年	小学館
	ヤマタノオロチ	照沼 まりえ 文 小林 ゆかり 絵	2005年	永岡書店
	やまたのおろち	羽仁 進 文 赤羽 末吉 絵	2002年	岩崎書店
	やまたのおろち	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
	スサノオの剣	川北 亮司 作 いそ けんじ 絵	1995年	アスラン書房
「いなばのしろうさぎ」「やまたのおろち」以外の日本神話を題材とした現在入手可能な絵本	国づくりのはなし ～オオクニヌシとスクナビコナ～	三浦 佑之 監 萩原 規子 文 早川 純子 絵	2017年	小学館
	天の岩屋	三浦 佑之 監 萩原 規子 文 大畑 いくの 絵	2016年	小学館
	国生みのはなし	三浦 佑之 監 萩原 規子 文 斎藤 隆夫 絵	2016年	小学館
	はじめての古事記	竹中 淑子 文 根岸 貴子 文 スズキ コージ 絵	2012年	徳間書店
	ゆかいな神さま 木をうえるスサノオ	岡崎ひでたか 作 篠崎 三朗 絵	2010年	新日本出版社
	ウミサチヒコ ヤマサチヒコ	照沼 まりえ 文 小林 ゆかり 画	2002年	永岡書店
	はじめのはなし	いのうえ ままり 文・絵	2002年	富山房インターナショナル
	オオクニヌシの宝	川北 亮司 作 いそ けんじ 画	1997年	アスラン書房
	あまのいわと	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
	うみさちやまさち	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
	くにははじまり	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
	すさのおとおおくにぬし	赤羽 末吉 絵 舟崎 克彦 文	1995年	あかね書房
日本神話を題材とした現在入手可能なお話集	やさしい心を育てる 日本神話	伊東 利和 著	2016年	幻冬舎
	子どもに語る日本の神話	三浦 佑之 訳 茨木 啓子 再話	2013年	こぐま社
	心をそだてる 松谷みよ子の日本の神話	松谷 みよ子 文	2010年	講談社
	日本の神話	平山 忠義 著	2003年	玉川大学出版部
	日本の神話	松谷 みよ子 文	2001年	のら書店
	親子で読める日本の神話	出雲井 晶 著	1995年	日本教文社

は7件、「やまたのおろち」の絵本は6件のみ¹²と、そう多くないのが現状である。代表的な昔話のひとつであり、教育出版による小学校国語科第2学年教科書下巻に「いなばのしろうさぎ」とともに掲載されている「かさこじぞう」が、「かさじぞう」のタイトルも含めると現在入手可能な絵本が30件もあることと比べると、就学前に「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」に児童が触れる機会は十分でないと言えるだろう。しかし、2000年代に入ってから「いなばのしろうさぎ」「やまたのおろち」共に着実に各出版社から刊行されており、特に「いなばのしろうさぎ」は2010年以降活発に出版されている。これは2010(平成22)年に全面実施となった現行の小学校国語教科書出版社5社のうち4社が「いなばのしろうさぎ」を掲載したことと無関係ではないだろう。さらに、「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」以外の日本神話を題材とした現在入手可能な絵本は2018年現在12件¹³あり、うち5件が2010年以降の発行となっており、また、日本神話を題材とした現在入手可能な児童向けお話し集は2018年現在6件¹⁴あり、うち3件が2010年以降の発行となっている。

2020(平成32)年度より全面実施となる新教科書に現行教科書と同じく「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」が継続して採用されたならば、連動して「いなばのしろうさぎ」および「やまたのおろち」、さらにはこれら以外の日本神話を題材とした絵本やお話し集の刊行がより活性化することが予想される。新教科書全面実施の折には、本研究と同様に所収の日本神話の対照研究を行うとともに、日本神話を題材とする絵本やお話し集についてもより細かな検討を加えたい。

注

¹ 教科書の発行者あるいは題材を同じくする絵本の発行者によって表記が異なるため、本稿では「いなばのしろうさぎ」とひらがなで表記することとする。「やまたのおろち」「おとたちばなひめ」も同様。

² 他方、中学校の国語教科書の教材としては秀英出版『私たちの国語 2下』(1956)所収「やまたのおろち」、そして日本書院『国語1 学校』(1962)所収「いなばのしろうさぎ」が採用されていた。

³ 1903(明治36)年から開始された国定教科書制度だが、戦後の教育改革により1947(昭和22)年に検定制へ移行した。

⁴ ちりめん本とは明治期の絵本の形態であり、明治18年から英語をはじめとする諸言語で発行されたが、ちりめん本『THE HARE OF INABA』は「Japanese Fairy Tale Series」全21作品のうちの一つである。

⁵ 本稿では 神志野隆光・山口佳紀(1997)『古事記』(新編日本古典文学全集 1)小学館を底本とした。

⁶ 四者すべてが原典にある「オオナムチ」でなく後の呼称である「オオクニヌシ」を採用しており、光村版と東京書籍版は「おおくにぬし」、三省堂版は「オオクニヌシノミコト」、東京書籍版は「おおくにぬしのみこと」の表記を採っている。その他の

主要な登場人物である「八十神」「兎」を指す呼称については、光村版は「八十人のかみさまの兄弟/兄さんたち」「うさぎ」、教育出版版は「八十人の兄弟のかみさま/八十人の兄弟」「うさぎ」、三省堂版は「おおぜいのかみさまたち」「ウサギ」、東京書籍版は「たくさんの あに神/あに神たち」「うさぎ」と表記している。「ワニ」については、光村版は「ここでは、さめのこと」との注を付しつつ「わに」、教育出版版は「わに(さめ)」との注を付しつつ「わに」と表記し、三省堂版は「サメ」、東京書籍版は「さめ」と表記している。

⁷ 表2においても同様。

⁸ 光村図書のホームページに記載されている文言のママ。以下同様に、各発行元のホームページに記載されている文言のママとする。

⁹ 小学校学習指導要領 道徳編 第1学年及び第2学年の内容の「4 主として集団や社会とのかかわりに関すること」を指す。

¹⁰ 「国語への関心・意欲・態度」のこと。続く【読む】は「読むこと」、【伝国】は「伝統的言語文化と国語の特質に関する事項」を指す。

¹¹ 同様に、同年改訂された保育所保育指針においても「保育士等が指導を行う際に考慮する」べき「ねらい及び内容に基づく保育活動全体を通して資質・能力が育てられている子どもの小学校就学時の具体的な姿」のひとつとして「保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」と示されており、その姿に至るまでの「乳児保育」「1歳以上3歳未満児の保育」「3歳以上児の保育」すべての段階において絵本や物語などに親しむことが示されている。

¹² 現在入手可能な出版物を検索することのできるWebサイト「Books.or.jp」で「いなばのしろうさぎ」/「しろうさぎ」/「おおくにぬし」および「やまたのおろち」/「すさのお」でキーワード検索を行った結果の中から、稲羽の素兎説話および八俣の大蛇退治説話を題材とした絵本のみを抽出した(国造りなどの稲羽の素兎説話以外のオオクニヌシに関する説話および天照大神の岩戸隠れなどの八俣の大蛇退治説話以外のスサノオノミコトに関する説話はこの表からは除外した)。一般書、そして絵本であってもゲームブックの類は除外した。また、こぐま社やひさかたチャイルドといった絵本・児童書の出版社が「特別パートナー」として協力している絵本・児童書の情報Webサイト「絵本ナビ」の特集ページ「神話の絵本」も補足情報として参考にした。「やまたのおろち」を題材とした絵本のうち、『スサノオ日本の神話』は、出版元のバイインターナショナルが「Books.or.jp」に参画していないため、「Books.or.jp」での検索結果には表れなかったが、現在入手可能な絵本である。

¹³ 「Books.or.jp」で「日本神話」および「日本の神話」でキーワード検索を行い、絵本のみを抽出した。

¹⁴ 「Books.or.jp」で「日本神話」および「日本の神話」でキーワード検索を行い、児童向けお話し集のみを抽出した。

【参考】

光村図書(2011)『こくご 二上 たんぼほ』光村図書
教育出版(2011)『ひろがることば 小学国語 2下』教育出版
三省堂(2011)『しょうがっこうのこくご 一年 下』三省堂
東京書籍(2017)『新編 新しい国語 二上』東京書籍

- 学校図書 (2011) 『みんなと学ぶ 小学校国語 二年上』 学校図書
- 家永三郎「古事記の受容と利用の歴史」(久松潜一編(1956)『古事記大成1 研究史編』) 平凡社
- 海後宗臣 (1969) 『歴史教育の歴史』 東京大学出版
- 棚田真由美 (2001) 「昭和戦前期小学校国定国語教科書における『古事記』の教材化に関する考察」 国語科教育第49巻 pp. 17-24
- 谷本由美 (2011) 「明治期児童向け古事記「いなばのしろうさぎ」のはじまり—チェンバレン「ちりめん本」から巖谷小波「日本昔噺」へ—」 同志社女子大学生生活科学第45巻 pp. 44-53
- 原田留美 (2010) 「日本の神話を補助教材としての扱う場合の問題点について—「いなばのしろうさぎ」の場合—」 新潟青陵学会誌第3巻第1号 pp. 21-31
- 原田留美 (2011) 「伝統的な言語文化の再話作品の諸相—小学校国語科教材「いなばのしろうさぎ」の場合—」 新潟青陵学会誌 第4巻第1号 pp. 13-23
- 原田留美 (2015) 「小学校国語科教科書掲載作品「ヤマタノオロチ」の再話作品としての特徴について」 新潟青陵学会誌第7巻第3号 pp. 25-33
- 原田留美 (2016) 「伝統的な言語文化の再話作品の諸相2—東京書籍発行小学校国語科教科書掲載の「いなばの白うさぎ」について—」 新潟青陵学会誌第8巻第3号 pp. 11-18
- 原田留美 (2017) 「領域「言葉」と小学校国語科の連続性」 新潟青陵学会誌第10巻第1号 pp. 20-30
- 神志野隆光・山口佳紀 (1997) 『古事記』(新編日本古典文学全集 1) 小学館
- 光村図書ホームページ <http://www.mitsumura-tosho.co.jp/>
- 教育出版ホームページ <https://www.kyoiku-shuppan.co.jp/index.html>
- 三省堂ホームページ <https://www.sanseido-publ.co.jp/>
- 東京書籍ホームページ <https://www.tokyo-shoseki.co.jp/>
- 学校図書ホームページ <https://gakuto.co.jp/>
- 神奈川県立総合教育センター 小学校国語教科書題材データベース <https://kjd.edu-ctr.pref.kanagawa.jp/daizai/Books.or.jp> (Search Engine for Japanese Books) <http://www.books.or.jp/>
- 絵本ナビ <https://www.ehonnaivi.net/>